

目黒稲門会会報



(題字：眞仁田 勉 初代会長)

第54号 2012年3月

発行人：大野 利幸 編集長：地田 博昌 事務局長：小杉 哲

事務局：〒152-0023 目黒区八雲4-9-14 Tel 090-7825-6270

2012年 新年会を開催

2012年の目黒稲門会新年会が、1月15日(日)目黒雅叙園シリウスの間にて開催されました。会場には、来賓、会員、ご家族など84名が集われ、過去最多の参加を得た昨年に匹敵する盛大な新年会になりました。

石川智子幹事の司会で開会が告げられ、早速第1部「新春講演会」に入りました。今回の講師は目黒区の小学校を卒業され、現在北京大学客員教授、工学院大学孔子学院学院長の西園寺一晃氏で、演題は「バブルの崩壊はあるかー転機に立つ中国経済」でした。司会の講師紹介に続いて約1時間の講演が行われました。

(講演要旨) 結論から言うと、今は大都市、特に沿海ベルト地帯の不動産バブルが経済を引っ張っている。しかし中国全体から見ると不動産バブルは一部であり、バブルが崩壊すれば影響は大きい、それで中国経済全体が潰れるということはない。

中国には、都市と農村と言う2つの世界が存在し、更に、厳しい時代を知っている世代と豊かさしか知らない2つの世代が存在する。中国の成長は70年代末から始まった。当時、鄧小平は2段階成長戦略として、まず沿海ベルト地帯に重点的に投資し、その後内陸部に成長を拡大する方針をとった。競争原理を導入し、力ある者がどんどん豊かになれるようにした。高度成長を実現した原因は4つあり、①欲望の解放による購買力の爆発 ②政府の意欲的公共投資 ③輸出振興政策 ④外資導入政策である。

70年代から購買力の爆発による内需型成長が始まり、80年代には衣食革命、90年代は家電革命が起こった。ところが90年代終わりごろから内需が低迷、高度成長下のデフレという現象が現れた。沿海都市部では、衣食、家電などの飽和状態が起き、一方内陸部農村は貧しく、購買力も低かった。つまり、中国の成長は外需型に転換した。輸出、外資導入、固定資産投資が成長をけん引し、中国は世界の工場になり、大量の外貨を生み出して、世界一の外貨保有国



となった。

都市住民の所得は増えたが、福祉の遅れから将来に対する不安も出て、人々は貯蓄に励んだ。

新しい消費分野が生まれないため、内需が低迷し、高度成長下のデフレ現象が生まれたわけである。

しかし、2005年くらいからデフレ現象は消え、内需が蘇った。車、住宅、観光、教育への新しい消費が起きた。2008年のリーマンショックは、素早い対応で乗り越え、世界で一番早く危機から脱した。

不動産バブルが崩壊したらマイナスになることは間違いない。他に格差や環境問題も蓄積されている。

今最大の問題は、産業構造の転換、内陸部農村住民の所得向上を実現することだ。持続的な成長をするためには、内陸部農村の内需を喚起し内需型成長に転換する必要がある。しかし将来、農村が豊かになると人件費は高くなり、外資が入って来なくなる。転換期の当面の問題は金融政策で、食料品等の値上がり防止のため金融引き締めか、企業の為の緩和か激論がある。現在は物価も落ち着く傾向にあり、金融を徐々に緩和する方向に舵を切りつつある。

いずれにしても、中国経済は今後若干成長のスピードは鈍るかも知れないが、破綻することはない。

一党独裁は経済の成長が続く限り、当面潰れない。GDPの国民1人当たりの平均が1万ドルを超える2030年頃が転機となる可能性がある。

☆☆☆

休憩をはさんで第2部「懇親会」に移り、大野利幸会長が主催者挨拶として新年を祝いました。

(挨拶要旨) 参加者に新年のお祝いを申し上げ、お忙しい中、出席して頂いた講師、来賓に感謝する。

目黒稲門会は13年目を迎える。会の活動状況をお話して挨拶とする。



昨年は新しい活動を増やすということでスタートした。その一つはボランティア活動推進部会で、東日本大震災に対し、義援金を集めて区長に届けた。今はポリオワクチンを開発途上国に贈る運動を進めている。もう一つ

は若い人中心の「若木会」を部会に昇格し、推進している。会員数は多いが、実際には部会に参加していない方が大勢いる。今、12の部会があるが、これからの趣味の会を増やしていきたい。



次いで、来賓の青木区長より新年の祝辞と、東日本大震災への目黒稲門会からの義援金に対する謝辞が述べられました。ここで、後藤克彦副会長の発声で乾杯となり、歓談に移りました。歓談中、司会より、今回初参加の会員4名の紹介があり、李昌子氏、宮崎慈子氏、狩野俊夫氏、林重雄氏からそれぞれ自己紹介がありました。更に歓談が進む中、会場からの声により手塚仁雄会員が壇に進み近況報告を行いました。宴たけなわにして、恒例となった松田哲也会員の元気一杯のエールで校歌斉唱。場内ひとつの輪となって、スクラムの絆も強く「都の西北」を歌いあげました。

井村正陽副幹事長より中締め挨拶があり、盛会の内に目黒稲門会辰年の出発を飾りました。お酒などのご提供を頂いた方々、この日もポリオワクチンの募金にご協力頂いた皆様に御礼申し上げます。

(田島 記)



新年会初参加会員（左から李、宮崎、狩野、林の各氏）

新年会出席者（敬称略、五十音順）

（来賓）

青木英二・目黒区長、西園寺一晃・講師

（会員）

浅海敏之、阿部喜久雄、荒瀬修一郎、
安藤 孝、安藤虎雄、石川智子、石川純子（母上）、
市瀬一江、市瀬達夫、伊藤 悠、稲垣博信、
猪名川一雄、井村正陽、岩佐幸子、岩佐好恭、
岩崎春雄、鵜野洋治、海口昭治、大内秀明、
大久保健治、大杉邦雄、大野利幸、
大野幸子（夫人）、大山高明、尾崎 充、小野 満、
影山信輝、笠谷興一朗、梶 恵作、柏木 博、
加藤榮護、加藤玲子（夫人）、狩野俊夫、
川井信義、川崎真樹子、河村晋彦、木村昭一、
郡山弘文、郡山富子（夫人）、小杉 哲、
後藤克彦、櫻井輝隆、佐々木芳子、佐藤喜孝、
嶋田勝彦、島田久家、下村尚久、田島順一郎、
橘 憲正、田畑 繁、地田博昌、千野逸平、
手塚仁雄、外岡 明、外岡ルリ子（夫人）、
中上美代子、長島清志、永田耕治、中西千可子、
中西元樹、服部尚彦、林 重雄、林田雅敏、
針谷紀子、樋口定廣、樋口俊彦、星野聡史、
牧野武夫、松田哲也、眞仁田 勉、水野弘文、
宮崎慈子、村上 柁、村田信之、森家一三、
保井 正、横山 大、吉田博行、吉本政治、
李 昌子、渡邊三郎、大橋ヒデ子（友人）



各部会からの案内・報告

美術・歴史鑑賞部会

第34回実施報告：

12月21日（水）の天気予報では晴れとのことでしたが、西洋美術館前に集まった午前9時20分は肌寒く曇り空でした。いつもの最前列の並びで、『プラド美術館所蔵—ゴヤ展』をゆっくりと鑑賞できました。

最大の注目は40年ぶりの来日となった「着衣のマハ」。同じくゴヤの代表作として知られる「裸のマハ」と対をなす作品で、当時の宰相マヌエル・ゴドイが私邸に隠し持っていたという。

鑑賞後、11名の参加者は上野精養軒で定番のカレー、ハヤシライスを食べ解散しました。午後には少し太陽も顔を覗かせ暖かくなりました。

今後の予定として、『セザンヌ—パリとプロヴァンス』（3月28日～6月11日・国立新美術館）と『マウリッツハイス美術館展—オランダ・フランドル絵画の至宝』（6月30日～9月17日・東京都美術館）を考えています。

美術・歴史鑑賞部会長 後藤克彦



囲碁部会

12月12日（月）、13時30分より、下目黒住区センターにおいて、囲碁部会の忘年囲碁会を行った。

参加者は16名で、棋力をベースにA、B、C、Dクラス（各クラス4名）に分かれ、各クラス、3局総当たり制で対戦しました。A：古川氏（品川からの応援）、B：眞仁田氏、C：佐藤氏、D：小倉氏が各クラスの優勝者でした。

夜の部は、近くの小料理屋「松喜」で、囲碁を中心とし、その他、色々な話題に話がはずみ、大いに盛り上がったひと時でした。

参加された方々には謝意を表するとともに、次回も楽しい会にしたいと思います。

囲碁部会 大久保健治

ボランティア活動推進部会

目黒稲門会として地域・社会に貢献出来る活動を推進する目的で、昨年3月に発足したボランティア推進活動は、直後に起こった3.11大震災への義援金と、ポリオ（小児麻痺）ワクチン購入資金（ワクチン5本分、1口100円）支援を主活動として活動を続けて来ました。

募金は毎回開催される各部会の参加会員の有志の方々からご厚志を寄付して戴き、災害義援金は7月に目黒区を通じ10万円を気仙沼市に、ワクチン購入資金は11月に6万5千円をNPO法人「世界の子どもにワクチンを日本委員会（JVC）」へ寄贈しました。ワクチン購入資金はJVCを通じユニセフに送られ、ワクチンとして支援国であるミャンマー、ラオス、ブータン、ヴァヌアツ等の国々へ送られます。ポリオワクチン購入資金募金活動は息の長い活動として今後も継続して行きますので、引き続きご支援戴きますようお願い致します。

その他新たにボランティア活動としてふさわしい活動があれば、積極的にご提案をお願い致します。

ボランティア活動推進部会長 稲垣博信



JVCからの感謝状

ゴルフ部会

第30回ゴルフ部会開催のお知らせ

日時：4月24日（火）

富士コース アウト・イン8時48分スタート

場所：富士国際ゴルフ倶楽部

〒410-1326 静岡県駿東郡小山町用沢1442-23

電話0550-78-0211

費用：23,000円（概算）

（バス代、パーティ費用を含む）

今回は従来の持ちハンデ方式から新ペリア方式に変更しました。奮ってご参加ください。

携帯090-7900-0246 メール osugik@a01.itscom.net

ゴルフ部会長 大杉邦雄

若木会

12月10日（土）目黒はじめ都内稲門会所属のメンバー約70名で忘年会を行いました。目黒、渋谷、杉並、太田、千代田、中野、中央、さらに西東京からも町田、八王子。ほかに、コンサートのアピールをかねて参加した早稲田大学合唱団など学生も5名ほど参加でした。今後とも、目黒を軸に、若手同士の横のつながりを大事にしていきたいと思います。

また、中西元樹幹事を中心に、目黒・早慶若手会の開催も相談中ですので、詳細が決まりましたらまたご報告します。

若木会部部长 石川智子



麻雀部会

12月11日（日）武蔵小山 麻雀クラブ・サンに於いて、2011年最後の第45回麻雀大会が12人参加により開催されました。

和気藹々の競技の結果、優勝は横山氏、準優勝は松尾氏、3位は千野氏でした。大会終了後、中華料理屋・井門にて忘年会を実施し、部会員相互の親睦を一層深めました。

今後の予定

4月7日（土） 第31回3区連合親善麻雀大会

6月17日（日） 第47回定例麻雀大会

麻雀部部长 鶴野洋治

ウォーキング部会

大分暖かくなってきましたが皆様歩いていますか。

3月、4月、5月の予定をお知らせいたします。

健康のために一緒に元気に歩きましょう。

初参加、初心者、友達、大歓迎です。

3月例会 名越から金沢街道に至る散策

海と富士の展望が良い古都鎌倉の東面にある衣張山 約4キロ

日時：3月6日（火） 午後1時

場所：JR横須賀線逗子駅改札外

4月例会 高尾山ハイキング

桜、山野草等を楽しみながら手軽なウォーキング 約7キロ

日時：4月17日（火） 午後1時

場所：京王線高尾山口駅改札外

5月例会 鬼平を歩く

水上バスで浅草へ、なじみの場所を回ります

日時：5月12日（土） 12:45（厳守）

場所：JR新橋駅銀座口改札外

小雨決行。参加希望の方は下記まで連絡ください

携帯090-9649-6868 メール tamakino@aol.com

ウォーキング部部长 牧野武夫



☆部会特別企画

「第3回鬼平犯科帳を歩く 浜離宮から浅草へ」

日時 5月12日（土） 午後12時45分集合

場所 JR新橋駅銀座口改札外

浜離宮の大名庭園を散策したあと、水上バスで浅草・吾妻橋へ向かいます。乗船時間は45分。船から眺める東京の景観は日ごとと違った新鮮さがあります。浅草では、隅田公園、今戸橋・山谷堀跡、待乳山聖天宮、池波正太郎生誕地の碑、浅草寺、浅草公会堂（著名人の手形）を歩いて、午後4時ころから「神谷バー」（予定）で懇親会をおこないます。

鬼平犯科帳を読んでいない方もお気軽にご参加ください。お申し込みはウォーキング部会の牧野部部长までお願いします。（連絡先は上記を参照）

猪名川一雄（昭和45年 政経）

旅行部会

「伊豆の踊子と西伊豆を訪ねる旅」道中記

旅行部会としては通算21回目の旅行を昨年11月3日より一泊二日で伊豆に焦点をあて実施いたしました。参加の皆様もこれまで何度も社員旅行や家族、友人と訪ねた事のあるところですが、しかし何度訪ねても味わいと新しい発見のある旅先でもありました。

川端康成の名作「伊豆の踊子」の辿った中伊豆から下田への天城越えと松崎、堂ヶ島から戸田を廻っての西伊豆の道中記です。

11月3日朝定刻8時に目黒駅を大型バスに16名の参加者で出発。参加者が少ない分、ゆったり、広々とバスを利用することができました。首都高から東名高速を利用、沼津ICで降りていよいよ伊豆のスタート。修善寺経由湯ヶ島の昭和の森公園内の「伊豆近代美術館」で「伊豆の踊子」の原稿や歴代映画パネル等を見学し、改めて「伊豆の踊子」の概略を見直しました。「浄蓮の滝」で昼食と見学。山葵田と滝の美しさに伊豆へ来たという実感に触れました。

昼食後、「天城峠」を越えて名にし負う「ループ橋」から「河津七滝」を見て湯ヶ野の「福田屋」の見学。この宿屋で主人公が踊子に淡い恋こころを抱いたことを自覚したところです。宿の女将は90歳を超えても、かくしゃくと我々に案内をしてくれたことに皆感心しきりでした。

途中からは大型バスが西伊豆へは抜けられない為下田まで南下、南伊豆町から松崎を経て本日泊まりの堂ヶ島着。「海辺の隠れ宿 清流」でゆっくりと温泉に浸り、海鮮の夕食に舌鼓をうち、宴会後は恒例のカラオケパーティーで盛り上がりました。

二日目はホテルからすぐの船着場から「堂ヶ島洞窟廻り」でスタート。巨大な岩肌が目の前に迫ったり、ラストの天窓洞に大興奮。下船後、松崎へ。「長八美術館」で漆喰鍍絵をルーペを使って見学、その緻密さに驚きと感嘆。すぐ向かいの浄泉寺「長八記念館」では天井に描かれた「八方睨みの龍」の絵は見る場所によりその顔つきが変わるのにビックリ。

松崎の街中をちょっと一回り後、再びバスにて伊豆西海岸をひたすら北上し土肥温泉から戸田へ。戸田は沼津市にありながらほんの30年ほど前までは船でしか来れない辺鄙な所でありました。昼食は深海料理で有名な「魚重食堂」。有名人のサインが所せましと張られ、世界最大の蟹「高足蟹」もいけすにおり記念写真も撮ることが出来ました。女将が非常に気さくで愛想が良いのに皆満足。

昼食後は修善寺経由、沼津へ。ICに乗る前に海鮮

のお土産屋さんで買い物。東名高速から都内環八、目黒通り各地で下車。最終目黒駅にて午後5時半解散。無事に旅が終了し、保険のお世話になることもありませんでした。

ご参加の皆様ありがとうございます御座いました。

次回は5月下旬～6月上旬に少し遠めの旅行を考えておりますがご希望あればお寄せ下さい。今の所「金沢」「京都」「札幌」の要望が寄せられています。

旅行部会長 井村正陽



よん月会

1月23日、いつもの都立大駅近く「あっぱれ」にて記念すべき第150回目の「よん月会」が開催されました。平成11年1月の第1回目より続く目黒稲門会で最も歴史ある会合です。会には大野会長を始め、眞仁田初代会長、浅海初代幹事長にもご出席戴き32名が参加しました。

あっぱれの店長の計らいで料理は「すっぽん鍋」で飲み、かつ食いで参加者全員がスタミナ満点の大満足でした。

会は毎月第4月曜日に開いて居りますので、どうぞご参加下さい。毎回のように入会者が参加しており、稲門会活動への入門口ともなっています。

よん月会世話人代行 井村正陽



カラオケ部会

3月の声をきくと霞は春霞で、空の色も春めいてきます。ふりそぐ春雨に、野山は静かな情熱をひそめて、若草萌える春を急ぎます。

私たちの季節——歌の季節がやってきました。

去年は参加者が少ない会が何カ月か続いたため、会の運営の健全化をめざして、10月から開催時間数や飲食物を少々制限させていただきました。ところが、12月、今年1月と15人を越えるご出席があり、早くも状況回復の兆しが見えてきたところです。皆さまのご理解、ご協力に厚く感謝しております。

春を迎え、この明るく楽しいカラオケ部会が、いつまでも続くよう切望してやみません。

定例部会：毎月第2金曜日 16時～19時

コート・ダジュール目黒駅西口店

(03-5436-2688)

カラオケ部会長 田畑 繁

俳句部会

俳句は大きく分類すると有季定型と自由律俳句の二つがあります。通常俳句といっているのは有季定型の方で、これは連句の発句を母体としたもので、必ず季語を使い、五・七・五の定型で詠むことが基本です。当会の「萩句会」もこの流れです。

一方自由律俳句は読んで字のごとく、有季にも定型にも拘束されない詩形で、河東碧梧桐の新傾向俳句運動を経て、萩原井泉水が「層雲」に季題無用論を唱え、「俳句は象徴詩である」と主張。尾崎放哉・種田山頭火等ほか多くの俊才を育てた。

第三十六回「萩句会報告」(順不同)

日時 1月20日(金) 14時～17時

安藤 虎酔	金色に細波染めて初日の出
川井 素山	魚焼く炭火を囲む朝の市
保井 寶正	冬ばたん男結びのわらの傘
米田 文彦	山峡の闇切り開く初日かな
佐々木彩女	穢れなき初日の前に言葉なく
牧野 里山	粉雪は津軽の里の風に舞ひ
青木 英林	大晦日ただ黙々と蕎麦を打つ
後藤 克彦	賀状書く絆を胸に筆走る
吉田 啓悟	冬ごもり煙草をやめて久しかり
丸山酔宵子	冬晴れやマウンテンバイクで山登る
菊地 崇之	初夢や足も軽やか吟行会
佐久間 喬	門松や真直ぐたてて一礼す

(参考作品)

佐藤 喜仙 漲れる初日は雲をはらひけり

俳句部会長 佐藤喜孝

会員の広場



古希に思う事

小倉 利允 (昭和39年 理工)

会社を退職、2年が経過した一昨年10月に古希を迎えた。会社勤めの46年間、バリバリの会社人間であったように思う。還暦の時は、全く何も感じなかった。日常生活が何一つ変わることも無かった。

しかし古希を迎えて、改めてこの2年間の物理的、精神的な変わりように自分自身驚いている。目黒稲門会に入会させて頂いたこともあり新しく知り合えた人達、今まで疎遠であった友人、知人等、数十人の人達との新しいお付き合いが始まった。こうした事は、会社に勤めていた時には考えられないことである。もともと群れることをあまり好まない性格でもあり、会社を中心とした価値観だけで過ごしてきたからである。

毎日、新聞を賑わせている社会問題に対しても自分に直接関係ないことには無関心であった。

最近はこうした問題に対して思いを巡らすことが多くなった。

このところ気になっていることがある。スロー消費、非婚・晩婚化、少子化、ニート、引きこもり、自殺等の現象が日常的に拡大していることである。この事が社会の見えざる空洞化を引き起こしていると言われている。

こうした中、東北地方太平洋沖地震に伴う甚大な災害に見舞われた。震災に立ち向かう日本人の冷静さ、規律を持った行動は世界に賞賛されているが、このまじめさが心配である。起こったことを受け入れる寛容性が、時として精神的な負担となり、社会の空洞化を更に進めるのではないだろうか。

若い人達が希望を持てる社会を創造出来るのか、最近の政治の為体を見ると極めて心配になる。

人口の約1/4を占めるようになった我々世代の出来ることは何だろうかと考えてはみるものの、名案も無く、結局は余り難しく考えずに、色々な問題に無関心にならず、自分のスタイルで社会の一員として過ごすことではないかと、最近考えるようになった。これからは人生終わるまで停年はないのだから。

皆様はこうした問題をどうお考えだろうか。機会があればご意見を拝聴したいと思っている。

傘寿の時にどのような世の中になっているだろうか。i PS細胞が出来る時代である。世の中の移り変わりが早く、技術の進歩と精神の調和が取りにくい時代が続くだろう。自分がどう対応しているか想像出来ないが、楽しみでもある。

リレー随筆



トルコ紀行

大久保 健治 (昭和37 理工)

私の趣味の一つに旅行がある。その旅行も、足腰がしっかりしている間は海外と思っている。現役の頃は、頻繁に米国や西ドイツへ出張したが、いずれもとは返りで、観光の時間はほとんどなかった。退職少し前から時間を作り、夫婦で積極的に、ヨーロッパ、東南アジアを旅するようにしている。

旅行先の風土、習慣、文化、歴史など事前に調べることも楽しみであり、その結果、旅行先のことが印象深く記憶に残り、思い出深いものとなる。

百聞は一見に如かずというが、大体その通りである場合が多い。どの旅行先も、皆、良かったが、2年前のトルコ旅行について書いてみたい。

トルコは、人口7000万強、イスラム教を国教とし、ヨーロッパとアジアの接点にあって、イスタンブールが有名である。北は黒海、南はエーゲ海、その間に、ボスポラス海峡、マルマラ海、ダーダネルス海峡がある。トルコ人は、親日的な人が多いようである。友好120年の歴史と、彼らが脅威だったロシアに対し、日露戦争で頑張ったというのが理由の一つらしい。

また、イスラムの国でありながらアルコールに寛容で、ワインがおいしく、「ラク」という45度の蒸留酒もある。イスタンブールは、嘗て、東ローマ帝国の首都コンスタンチノーブルであって、キリスト文化とイスラム文化が混在している。4月半ば、イスタンブール・イン・アウトのツアーに参加。

第1日目、朝5時ごろスピーカーから流れる「コーランのお祈り」で目が覚めた。1日5回捧げるそうである。思わず冗談半分、「コーランの 祈りを聞いて イスラムの 国にいるかと 今朝は思へり」と下手な歌を詠んだ。

朝食時、覚えてたのトルコ語「ギュウナイドン（おはよう）」で皆と挨拶。早速、ビュッフェスタイルの食事。ヨーグルトはトルコが発祥の地で、蜂蜜をたっぷりかけると大変おいしい。生産量世界有数のオリーブもふんだんに出た。ただ、ハム・ソーセージは宗教上の理由から豚でなく、牛、鶏、羊、馬を混ぜたものだそうであり、変わった味だった。

それでは、出発進行。紙面の関係で、主な所を辿っていく。最初に、渡ったダーダネルス海峡は、後述するボスポラス海峡とともに知識だけはある、この辺りは、いつか訪れてみたいと思っていた憧れの場所であった。船上で、年甲斐もなく感動した。

アジア側で先ずトロイの遺跡を訪れた。5000年前

からの史跡は、かなり荒廃していたが、学生時代に見たイタリア女優ロッサナ・ボデスタ主演の「トロイのヘレン」を思い出しながら、半分、神話の世界に浸るのもまた楽しからずやであった。

エーゲ海を見ながら南下し、エフェソスの遺跡を訪ねた。その昔、クレオパトラとアントニウスが、東の間の蜜月を過ごした時、散歩したとされる伝説の大理石通り、図書館・大劇場などの公共施設、世界最初の水洗トイレ・浴場・台所など生活場所、売春宿などの娯楽施設等一つの社会を形成しており、まさに、タイムスリップした感じであった。

次に、東へ進路を取り、温泉地であるパムッカレを訪ねた。パムッカレの古代都市のヒエラポリス遺跡と、石灰の結晶が、段々に上下に連なる石灰棚は壮観であった。石灰棚には、温泉が溢れ、多くの国の観光客が足湯を楽しんでいた。

さらに東へ。奇岩群で有名なカッパドキアを訪ねた。昔、キリスト教徒がアラブ人から逃れて住み着いた岩山の住居、教会などの生活空間、松茸みたいな岩柱など、奇観であった。岩山を削ったホテルの部屋へ宿泊したのも、貴重な経験だった。

バスは、アンカラに向かい、アンカラ特急1等寝台で、8時間ほど要してイスタンブールのアジア側へ到着。そこから念願のボスポラス大橋を越えたが、いずこも同じ車社会で、渋滞がすごく、イメージダウンであった。アンカラ特急はアガサ・クリスティの小説「オリエント急行殺人事件」にも登場し、乗客は、当時、船でヨーロッパ側イスタンブールへ海峡を渡り、そこから、ヨーロッパへ旅立った。

ヨーロッパ側のイスタンブールは、ブルーモスク、トプカプ宮殿、アヤソフィアなどオスマントルコ繁栄時を彷彿させる観光の目玉が多くある。

一方、西洋風のトラム、ブティック、明るい町並み等は、ヨーロッパの一部であるといった感じで、それらが、うまくイスラムと溶け合っている。そこでまた、下手な歌を一首。「東西の 架け橋となる この街に 異質文化の 融合を見る」。

海峡には、往来する船の管制塔があって、国際海峡らしい雰囲気が感じられた。

残念乍ら、かなり割愛したので、説明不足が否めない点ご容赦を願い、この辺で、筆を置きます。



カッパドキアの奇岩を背景に

ようこそ！部会活動へ

ウォーキング部会へのお誘い

ウォーキング部会長 牧野武夫

平成18年6月、ウォーキング部会の第1回目として「北鎌倉円覚寺から瑞泉寺の花を巡るコース」を実施するにあたり、次のようなお誘い文が会報に掲載されています。

「古都鎌倉の寺社を巡り、森林浴をしながら同好の方と一緒に花を見て歩きましょう」

スタート時、ウォーキング部会は「鎌倉花散歩の会」と別称していました。5年たった今でも目指すところは全く変わっていません。ゆっくりと、楽しく、体に過度の負担をかけることのないようにを基本に活動しています。

ウォーキングと言えば、とかく、食生活の欧米化に伴う生活習慣病の運動療法として、又、日頃の運動不足の解消や健康増進のための手軽な運動として、悲壮観一杯の必死の形相で取り組むのが一般的ですが、我がウォーキング部会の活動はそこまでハードではありません。

活動は原則毎月1回、鎌倉の花巡りを中心に実施し、最近では多少足を伸ばして、三浦半島や小田急沿線の花巡りをしたり、東京下町の鬼平犯科帳の舞台巡り等もまじえ、多彩になってきました。

各会とも平地コースを中心に計画を心がけ、あまり足に自信のない方や、か弱いと自称される女性も気楽に参加頂いて、毎回楽しく実施しています。

そして特記すべきことのひとつが、毎回「午後1時現地駅集合」です。午前中に家事を片付けすっきりした気持ちで参加いただけるのが大変好評です。

もうひとつの楽しみが、ウォーキングの後、日が傾きかけてくるのも待ち遠しく始まる「現地反省会」です。腰越漁港の舟宿や、鎌倉小町通り路地裏の居酒屋で、とれたての地魚や地野菜を肴に手軽な価格で一杯やるとまさに至福の時を感じます。ウォーキング部会をこれなしには語れません。この反省会があるから参加しているという会員も沢山（ほとんど？）います。

これからも広い年齢層の会員の方に参加していただけるような楽しいプランを企画してまいりますので、皆さんふるってご参加ください。若い年代の会員や女性会員が沢山参加していただければ、一段と楽しさも増すのではないかと思います。

心と体の健康のために、一緒に楽しく歩きましょう。部員一同、心からお待ちしています。

参加ご希望の方は是非下記にご連絡下さい。

携帯 090-9649-6868 メール tamakino@aol.com

新 入 会 員



木村陽児（昭和31年 商）

（横浜市在住）

職業は制御機器輸出入の商社をやっております。また、中国北京の会社の役員をして居る関係で、時々中国へ行っております。3年程前から桑野さんの誘いで当会のウォーキング部会に参加しております。今後共、宜しく御願い致します。



林 重雄（昭和41年 法）

（相模原市在住）

相模原在住ですが、目黒高校卒で3年ほど前から当会のウォーキング部会に参加しています。ラテンアメリカ文学に興味を持っております。どうぞ宜しく御願い致します。



狩野俊夫（昭和42年 理工）

（洗足在住）

中学時代（大森六中）からハンドボール一筋、大学ときは母校学院のコーチをしていました。大学では建築を学び卒業後は東急建設に入社、一番記憶に残る建物は渋谷にある東急文化村建設工事です。今後共、宜しく御願い致します。



大山 豪（平成10年 社会）

（鎌倉市在住）

目黒区内で育ちましたので、目黒には愛着があります。現在は神奈川に住んでおり、離れておりますが、目黒の先輩方後輩とも交流させて頂ければ幸いです。どうぞ宜しくお願い致します。



李 昌子（平成22年 政経）

（青葉台在住）

2005年にカナダから日本に来ました。早稲田卒の目黒区の皆様との交流を楽しみにしています。これからどうぞ宜しくお願い致します。

編 集 後 記

今号から、会員の広場・リレー随筆に、筆者の顔写真を添付するように致しました。順調に新入会員の入会が進んでいますが、会員が増えるにつれ知らない顔も増えてきます。何かの部会や会合でお会いしたときに、気楽に声をかけていただければ一助になればと願っています。（地田 記）